

ブロード・ピーク登頂

8047 メートル・ヒマラヤ カラコルムの名峰

JAPAN BROAD PEAK EXPEDITION 1993

御 礼

もう忘れられたと思いますが、3年前によせばいいのにカラコルムの山にでかけた伊藤です。その時の報告書が何とか出来上りました。

『だすのが遅いとか』、『内容がねえなー』と覚悟の上の作成です。『こんなの読みたくもネー』といってる諸先輩まあ一せめて表紙の写真だけでもみて下さい。多少興味があれば19頁のルート図と対比してルートの研究でもしてください。こんな平な所を登りやがってと多分おおもいのことでしょう。

さて、そのせつは大変お世話になりました。いろいろとあった登山ですが、ワンチャンスを逃すことなくメンバーが8047mを登れたことは大変素晴らしいことだと思っています。今回の海外登山に際し、ご指導、ご援助いただきましたことに御礼申し上げます。

日本ブロード・ピーク登山隊 93'

伊藤 守

96年 6月

JAPAN BROAD PEAK EXPEDITION 1993

ブロード・ピーク登頂

8047 冠・ヒマラヤ カラコルムの名峰

主 催 日本ブロード・ピーク登山隊 '93

協 力 ヒマラヤン・グリーン・クラブ

”8000㍎の頂、それは時代を越え、世代を問わず、ヒマラヤへの熱い思いを誘い続けてきた、地球上の空極の高みである。”

これは「日本ブロードピーク登山隊1993」の登山計画書の前文である。まだ社会人一年生だったころの私には外国の山を語るだけの知識もなく、せめていろいろな登山記録をむさぼり読むだけにすぎなかった。その中の一冊に「地球上には8000㍎を越す峰が14座あり、フランス隊はこれらの峰々を登頂していったのである。〈ブロードピーク8047㍎〉」のタイトルに目を見張り、読みふけたのを思い出す。海外遠征は夢物語にすぎないと長い間思い続けてきた。それが今、現実に計画が進行しているのである。

遠藤との幾度となく打合せ、最終的に1992年3月に”ブロードピーク”に決定した。隊員も私の海外登山仲間を中心に募った。93年5月出発を目標にして、92年3月登山計画書をパキスタン観光局に提出し6月に正式な許可がおりた。日本での準備は、関根、遠藤が7～8月にインドヒマラヤ・ヌン峰へ遠征するので、伊藤を中心に計画を練り上げ、食糧品、装備などの調達を行なった。8月末にヌン峰から帰り、全隊員が集まり計画を細かく検討していただく。今回は特に、遠藤が提案者となり〈ヒマラヤの緑をとり戻そう〉との運動をもちこんだ。パキスタン・バルトロ氷河舌端のパイユに植林し、荒れた砂漠化した荒地に緑を取り戻す実践活動をしよう、という壮大な計画である。植林には別行動の専門家とトレッキング隊を組織した。当初登山隊員も植林に協力する計画であったが、隊荷の遅れなどのトラブルがあり、一緒には活動できなかった。計画が大幅に狂い、伊藤・沢田には大変な迷惑をかけることになってしまった。しかし連絡将校も伊藤と共にカラチまで飛んでイスラマバードに待望の荷物が届いた時には本当に肩の荷がおりる思いがした。キャラバンも10日遅れで出発、隊員たちも笑顔を取り戻しやっと山に入る元気がでてきた。

6月21日BC設営し、本格的登山活動に入る。C₁、C₂キャンプ設営中に幾ども悪天候に阻まれ、一進一退の進行状態のなか、隊員はそれぞれに協力しあっていたが、なかには見苦しい言動も見受けられてとても残念に思った。しかし私は登山が無事終了するまでは、口に出すまい---と心ひそかに決めていた。

そして3名の隊員とハイポーター2名が登頂を果たした。その陰には多くの人々の協力があり、勝手に登られたわけではない。隊員の安全を守る立場にありながら、自分の責任を感じない隊員がいたことは、常識を疑ってしまう。高価な酸素をC₃まで荷上げしたにもかかわらず、酸素マスクがなくて使用不可能とは、あまりにも幼稚すぎるのではないだろうか。事前のチェックを怠っていた私もうかつだった。しかし晴天のワンチャンスをつかんで、田村・辻らがC₃(6900㍎)から登頂してくれたことは嬉しい。そして全員が無事に下山できたことが何にも増して嬉しい。

フィックスロープ、ゴミに関しては、BCで焼却し、空缶その他100㍎を4人のポーターでスカルドまで下ろして処分した。環境問題に十分心を配り、豊かな自然を大切に、いつまでも山に親しんでいきたい。私たちの遠征に際してご協力、ご指導を頂いた皆様がたに厚く御礼申し上げます。

1996年5月

J B E - 9 3 (ブロード・ピーク) 登山隊 行動概要

5月21日	PIA751にて成田出国	
5月29日	隊員3名をイスラマに残し、空路スカルドへ	
5月30日	船便隊荷遅れのため伊藤、LOで1500kg離れたカラチへ	
6月7日	隊荷20日遅れでイスラマに到着、翌日1.5トンの荷物と共にカラコルム・ハイウェーを突ばしり40時間を要しスカルドへ	
6月13日	アスコーレでポーター148人(隊荷3ト)雇用、キャラバン開始	
6月16日	ポーター、パイユ(3600名)にて給料額でもめ騒然となる。	
6月21日	BC(4950名)到着 パルトロ氷河から分れゴットウイン・オースチン氷河に入る K ₂ (8611名)のBCの手前、ブロード・ピークの西稜の真正面のモレーン上をBCとする。	
6月22日	BC設営完了 荷物整理、食糧、装備を各キャンプごとに分別、3日を要す	登山活動1日
6月24日	C ₁ 設営(5500名) BCよりゴットウイン・オースチン氷河を斜めに横断する。氷河は概して安定はしているものの3ヶ所の水流渡りに注意し、主峰と中央峰のコルより落ちる(懸垂)氷河の左岸雪溪が取付き点となる。途中自然落石、荒れた急な氷河に注意しながら、右にカーブし青氷部を通過すると緩い雪面となる。	3日
7月1日	C ₂ 設営(6300名)	10日
7月5日	C ₃ 設営(6900名)	14日
7月8日	~7月13日まで連日降雪	
7月21日	第1次登頂 西稜ルートは上部懸垂氷河上にC ₄ (7450名)を設けてアタックするのだが今夏の不安定な天候の為C ₃ (6900名)より高差1100名以上のアタック、隊員3名、高所ポーター2名で夜3時に出発、コル(7850名)10時、前衛峰(8006名)を越へ、主峰(8047名)13時30分4名登頂。帰幕21時過	30日
7月22日	第2次アタック中止(悪天) 未明より風雪、下部のキャンプに降りる。以後連日風雪。	31日
7月27日	C ₁ 、C ₂ 荷下げ	36日
7月29日	ニマ・テンバ隊員登頂	38日
7月31日	BC撤収、帰路キャラバン ポーター48名雇用	40日
8月4日	アスコーレのさきトンゴにてキャラバン終了	
8月9日	イスラマ到着	
8月15日	PIA752にて成田帰国	

1、登山の結果

93年7月21日 13時30分

田村正勝・辻 信広・ラジャーブ(HP)・サルワール(HP)4名主峰に登頂

中山 祐朗 (7400㍔まで)

関根 幸次 (6900㍔C₃まで) 遠藤 京子(6900㍔C₃まで)

伊藤 守 " 沢田 幸子 "

工藤 敦子 "

7月29日 ニマ・テンバ隊員 主峰に登頂

2、登山期間(日程)

6月14日 アスコーレより、キャラバン開始

6月22日 BC(4950㍔)設営

登山活動1日

6月24日 C₁ 設営(5500㍔)

3日

7月 1日 C₂ 設営(6300㍔)

10日

7月 5日 C₃ 設営(6900㍔)

14日

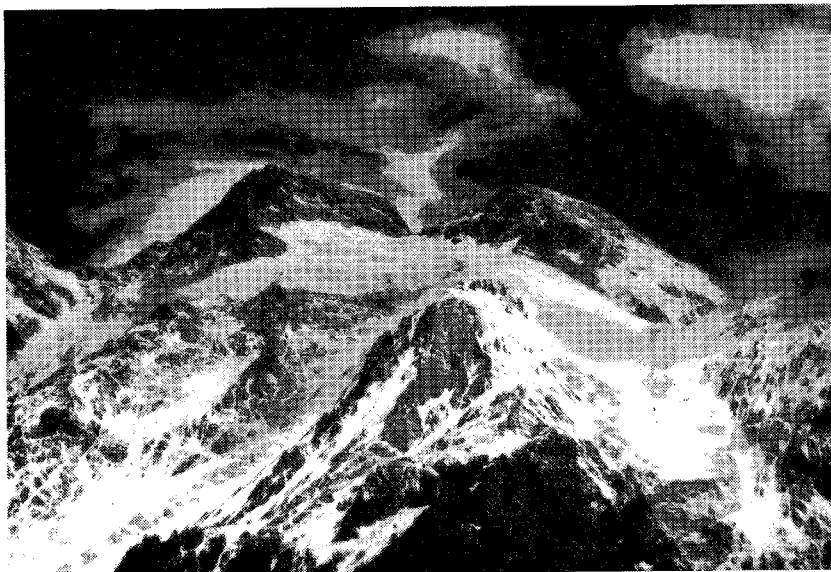
7月31日 BC撤収、帰路キャラバン

40日

8月 4日 アスコーレの先、トンゴでキャラバン終了

3、山の概説

パキスタン・カラコルム山脈の数ある8000㍔峰の中でもブロード・ピークは山容が「デカク」ちよつとカッコよくない山ではあるが、8000㍔を越えてからの鋭い頂稜がえんえん続く難峰である。登攀ルートは世界第2の高峰K₂より発するゴットウイン・オースチン氷河より高差3000㍔を一気にせり上る西稜にルートをとる、主峰は鋭い頂稜でありパキスタン・中国国境に突きあげている。



4、登山隊員

隊長 関根 幸次

- ①隊長
- ②〒333 埼玉県川口市
- ③わらじの仲間
- ④インド・サトパント(7054名) 他



副隊長 遠藤 京子

- ①渉外
- ②〒520 滋賀県大津市
- ③京都山岳会
- ④ネパール・マナスル(8165名) 他



隊員 伊藤 守

- ①登攀リーダー
- ②〒133 東京都江戸川区
- ③東京朝霧山岳会
- ④インド・バスキバルバット(6792名) 他



隊員 ニマ・テンバ

- ①登攀リーダー
- ②c/o Hinarayan Journey
- ③ネパール登山ガイド
- ④中国・チョーオユ(8201名) 他

KATHMANDU NEPAL



隊員 沢田 幸子

- ①会計
- ②〒170 東京都豊島区
- ③わらじの仲間
- ④インド・ヌン(7135名) 他



隊員 田村 正勝

- ①環境・輸送・ルート工作
- ②〒166 東京都杉並区
- ③黒稜山岳会
- ④中国・クラウン峰(7295名) 他



隊員 中山 裕朗 ①食糧
②〒154 東京都世田谷区

③奥多摩山岳会
④インド・ヌン峰 他



隊員 工藤 敦子 ①医療・食糧
②〒154 東京都世田谷区

③黒稜山岳会
④



隊員 辻 信広 ①輸送・ルート工作
②〒612 京都市左京区

③京都岳人クラブ
④ヨーロッパ・アルプス 他



L O Mr カマール ①連絡将校
②パキスタン・ラホール



H P Mr ラジャーブ ①高所・ポーター
②パキスタン・フンザ

H P Mr サルワール ①高所・ポーター
②パキスタン・フンザ

”パキスタンのヒマラヤへ”

ブロード・ピークを目指して

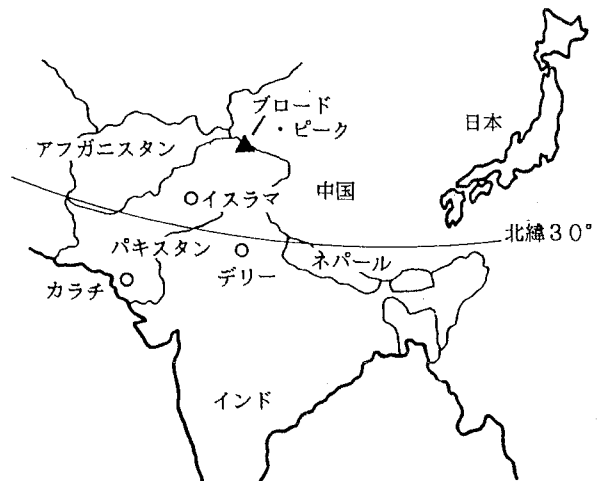
沢田 幸子

世界の屋根と呼ばれる広大なヒマラヤ山脈の西のはずれに、ひとときわ高い山群がある。パキスタンのカラコルムの山々で、世界の8000mの高峰14座のうち5座もあり、7000m以上の山だけでも700以上、6000m級になればもう数限りないほどの山々がそびえている。私たちがこれから目指そうとしているブロード・ピークは、それらの高峰のひとつで世界で12番目に高い山である。しかしアフガン紛争や難民の問題、インドとの長年にわたる国境紛争など、パキスタン特有の政治・宗教的問題が、登山を実現させる前のいろいろな難問として、いまだに深い影響をあたえている。情報を得にくい、時としてヨーロッパの山々よりもはるかに遠くに感じられる山域である。

”When I grow too old to dream”（夢みるところを過ぎても）という甘美な歌が昔、流行した。山々に通いつめていた青春のころにはたいして心にとめていなかったが、久しぶりにきくメロディーに懐かしさを覚えた。一昨年のインドのヌン峰、そして今回のブロード・ピークへと、やっぱりいくつになっても夢はみつづけていたい-----。よく人生は山登りにたとえられるが、山登りも私にとって人生の一部なのだから、”Somewhere over the Rainbow”（虹の彼方に）と、まだ当分は山々をはいかいする日が続くのかもしれない-----。

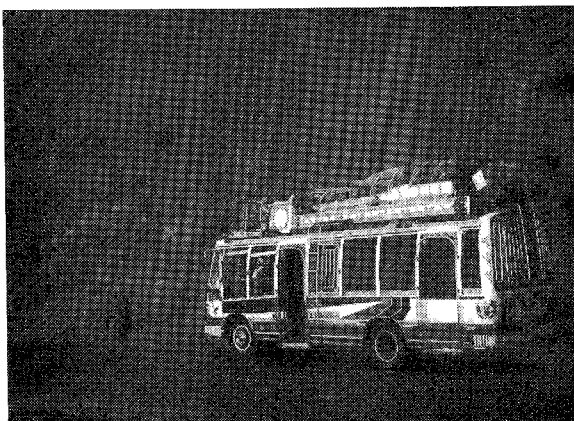
パキスタンは南北に長い国で、面積は約日本の2.1倍である。日本への輸出額の約2倍を日本から輸入しており、対日感情は宗教の違いがあってもすこぶる親日的である。アラビア海に面するかつては首都であった南端のカラチは、中華民国の台北とほぼ同緯度にある。現在の首都イスラマバードは北九州市あたりになる。そしてカラコルムの山々がそびえている北方は、日本の中央の北アルプスあたりの緯度という見当だ。世界一高い山エベレスト（チョモランマ）が同じように見ていくと沖縄諸島あたりということからかなり北の峰に位置していることが分かる。

夏にはヒマラヤの山々へ雨をもたらし、すもすもその影響を及ぼす。しかしカラコルム山脈は西方の内陸に位置するあまり大きな影響は受けない。非常に乾燥した砂漠地帯となり、雨量も東京の1/10位いと少ない。だが日中と夜間の気温差が大きい大陸性気候なので、特に国の中央を流れるインダス河沿いでは、夏は40度以上の猛暑となりつらい季節だ。日本からは飛行機で首都イスラマバードまで7~8時間であるが、



▲日本—ヒマラヤの位置

時差4時間を含めるとたつぷり1日の空の旅となる。公用語はウルドゥ語と英語で、片言の英語を使えば何とか用がたせそうだ---。通貨はルピーでドルとの交換比率は1US\$が28~33ルピーくらい。今回はドル安、ルピー安という二重の円高で、費用も幾分安くすんだようだ。春の出発の時は1\$=¥125位いで帰国した時は、1\$=¥100すれすれだった。



ブロード・ピークは1957年オーストリア隊によって初めて登られた。イギリス隊がエベレストに初登頂した4年後のことである。その後はインドとの国境紛争のあおりで長い空白が続いた。それから20年後、日本の愛知学院大隊によって第2登が成された。それ以後1980年代になると、比較的登りやすい8000m峰ということもあり、女性も登頂するようになってきた。今回の我が隊は果たして何登目になるのだろうか――。

▲2昼夜、疾走したバス

有名なバルト口氷河や氷の十字路とよばれる白き氷河の果てのコンコルディア、そしてその雄大きわまりない山岳景観を胸に描きつつ、私たちは、5月下旬に成田を発った。

”アスコレーへ向かう”

定刻より20分遅れで成田を発ち、およそ12時間の空の旅の後、夜8時すぎやっとならばパールコンチネンタルホテルへ、我々はフラッシュマンズホテルへおちついた。気がかりだった船便の隊荷がカラチからまだ着いていない。それから荷が到着するまで実に2週間以上もかかったのである。

6月8日、隊長、伊藤、沢田の3人とLO(連絡将校)のMr.カマールで隊荷と共にチャーターしたバスでスカルドに出発する。植林隊や他のメンバーは空路1時間というのに、インダス河沿いの地獄のようなカラコルム・ハイウェイを2夜走り続けるというバスの旅だった。6月10日、昼ころやっとならばスカルド入りしてK₂モーターにおちついた。11日は終日出発準備に忙しくて、夜はスペイン隊との合同ディナーパーティーがサッパラホテルであった。登山隊員5人、トレッキング隊員4人で私たちと同様にブロード・ピークを目指している。オリエール(スペインアンドーラ地方から来た隊の一員)とはラウルピンディーでも顔なじみだが、他のメンバーとはあまり話ができない。トレッキング隊員の中には、片足で松葉杖を使用している青年がいた。

6月12日 早朝8時のジープで最奥の村アスコレーへ向けて出発する。カラコルムの山々のふもと、アスコレー村ときくと何となくロマンチックにひびく。岩と雪の険しい山々を背景にした緑豊かな村、と自分勝手に思いこんでいたのだ。

” 桃は紅にして 復た宿雨を含み
柳は緑にして 更に春煙を帯ぶ”

「田園楽6」 王維 より

イメージをふくらませすぎていたのである。本を読んだり資料を調べたりしているうちに、これとはほど遠いということが分かった。そのために今回は植林隊も組織されたのである。村はずれのほこりっぽい広場に荷を下ろす。午後1時すぎでお腹がすいた-----。

” キャラバンの日々”

6月13日、早起きしたわりには、出発が昼近くになってしまった。ポーターへの荷の仕分けや契約書の作成など不慣れなことばかりで、はかどらない。村を通りぬけてから右岸側壁の細いガケ道に行く。対岸の台地状の砂地へ渡ると、花びらの大きいバラが沢山咲いていた。インド・ヌン峰へ行った時に見たのと同じだった。

コラホンはかつて緑豊かに繁る森林だったそうだが、林ともいえずところどころに木が生えているという感じである。幕営地は広々としているが、今日は信州大のインターブラック隊、カナダ隊、スペイン隊と4隊が一緒に、ポーターの数も大そう賑やかだった。

翌日、ジョラの渡しは3隊が一緒になってしまったのだから、ものすごい混雑である。1時間に40~50人くらいとみて、約300人が渡りきれぬのにどのくらいかかるのだろう。少し早いバルディマルで幕営する。

パイユまでは約3時間、切り株が目立つ林の段丘状の右岸台地にテントを設営、強烈な悪臭にはまいった！この日は賃金のごとでポーター達の動きが不穏になってきた。不慣れな私はもうノイローゼ気味だった。キャラバンはこれから大変なのだから、少なくとも身体だけは休養せねば-----。

ウルドカスへは氷河の堆積上を歩くようになる。途中風雪が激しくなりルートが分りにくい箇所もあった。3時半到着。中山・工藤さんが遅れてみんなが大さわぎをしている時、やっと現れた。6時半すぎで皆ひと安心した。別のルートを来たようだ。



▲ガシャブルムIV峰（右）

ゴレにはアーミーキャンプがある。氷河上の広い所なので3隊が離れて幕営した。スペイン隊のトレッカーの松葉杖氏は空身だが毎日皆と同じように行動している。スキーマの選手だったがケガで右足を切断したという。たくましい上半身はクライマーのように見えるが、連日のキャラバンはさぞ大変だろう。

6月19日コンコルディアへ、本格的な氷河歩きとなる。高度順化のためにゆっくりゆっくり歩く。待望のブロード・ピークが左前方に見えてきた。正面にはどつかりとガシャブルムIV峰が、やがて



▲ B C (4950 ㍎) 設営にて

大きな K_2 も久しぶりの青空のもとにまぶしく実に雄大な景色だ。

6月20日やっと B C 入りとなった。氷河中央の台地に下からアメリカ、イタリア、スペイン隊と各 B C がある。我々はその上流に B C を定めた。標高 5100 ㍎くらいか。午後から頭痛がひどくなってきた。翌日もみんなが装備や食糧の整理に忙しくしているのに、休養させてもらおう。申し訳けない。8日間のキャラバンが終わり明日からいよいよ登山活動が始まる。

”登山日誌より”

沢田 幸子

6月23日、関根・田村・辻・遠藤・ニマ・HP 2名で C_1 へ荷上げ。

6月30日、私は初めて C_1 まで荷上げする。取付点で大きな雪崩に遭い、右側の岩壁にしがみつく。猛烈な風圧と雪煙で関根さんも私も頭から灰をかぶったようになってしまった。早朝の北西面でこんな雪崩が起きるなんて思いもかけなかった。途中のデポ地まで2時間、更に2時間で C_1 へ10時すぎ到着。

K_2 が大きく見える。

7月3日、初めての C_1 での泊りだ。翌4日は C_2 へ荷上げに向かう。5時半に出発して8時20分に着いたので、私としてはまあまあだろう。 C_2 からの展望は何といっても K_2 が圧感だ。遠くナンガパルバットも見える。ゆっくり休んで C_1 へおりる。

7月5日、 C_3 へのルート工作もかなり進んだもようだ。 C_2 へ向かう。昨日より早く着いたのは、身体が高度になれてきたからだろう。 C_3 へ上がった隊員も昼ころにはおりてきて、久しぶりに一同そろってのんびりとした半日を過ごす。しかし遠藤さんは具合が悪いといって C_1 にいる。このところ B C では L O が留守番だ。

7月6日、 C_2 へ上がり泊まる。午後はとても暑く少し頭痛がしたので薬を飲んだ。7日、B C へくだる。全員休養日だ。数日間続いた好天で氷河のようすも少し変化してきた。韓国隊が B C 入りし、我々のすぐ下にテントを設営した。イタリア隊はこのところの好天を利用して昨日今日合わせて5人登頂した。

7月9日、昨日からの雪はまだやまない。韓国隊に招待されて昼食を共にする。双方ともあまり上手くない英語で、辻さんが韓国語で話して若い人たちと親しくなる。10日、11日と雪やまず、イタリア隊の登頂は本当にタイミングがよかった。次の好天には私たちも登頂までもっていききたいものだ。

7月14日、好天の中 C_2 まで上がる。高度に大分、馴れてきたのか、体調もよい。しかし翌日からまた雪になり、16日全員 B C へおりる。

7月17日、日本で大地震（北海道南西沖）が発生、インドで大洪水などのニュースが入った。午後 J A C 東海の田辺さんらブロード・ピーク隊が到着し

た。彼や江塚さんはこの冬にサガルマータ南西壁を目指すという。

7月19日、全員でBCを出発するが、途中のデポ地で遠藤さんだけBCに戻った。他はC₁とC₂に泊まる。何とか好天が続いてくれればと願う。夜は久しぶりに天の川がよく見えた。

20日天気が良くなったので、韓国イタリア、スペイン隊など皆BCから上がってきた。関根、伊藤、工藤と共にC₂へ上がる。C₃のテントを修復し明日はアタックできそうだという。

▼C₂への荷上げ(6100m付近)



7月21日、快晴のもと5人が頂上に向かった。私たちは6時C₃に向けて出発する。C₂上部岩壁帯を右にトラバースして雪原に出る。傾斜のある広い雪原だ。最後の数ピッチは露岩の急斜面で苦しかった。10時50分C₃に到着、中山さんがいた。コルの手前で不調のため戻ったとのこと。田村、辻2人のHPはもう頂上近くまで行ったのだろうか。C₄を作れなかったため、ここC₃からのアタックというのは、かなり困難なことだろう。私はテントの中で少し休憩する。1時すぎ中山さん、工藤さんと共にC₂へ降りる。雪原を一人で登ってくるオリエールに会う。明日のアタックの成功を祈って別れる。私達のアタック隊は午後1時30分登頂したという!! よかった。しかし帰路は田村さんが遅くなって夜9時すぎC₃へ戻ったとのこと、HPが2人もいて何故田村さんを残して先に下山したのだろうか。

7月22日、朝のうちは晴れていたのに午後から風雪となった。第二次アタックが不可能となり装備・食糧など撤収することになる。23日終日風雪の中C₂からBCにおりる。もう登ることのないルートを黙々とくだり9時半BCへ到着した。午後田辺さんの隊が登頂祝いの会を開いてくれた。久しぶりの日本の味がおいしかった。

7月24日、韓国隊を昼食に招待する。日・韓・ネパールの歌がとびかった。しかし外は小雪がちらつき寒い一日、真夏とは思えない。25日も降雪で、最後のアタックチャンスも望みうすになってしまった。

7月27日、中山、辻さんが最後の荷下げに行く。夕食に田辺隊を招待し、せい一杯のごちそうを作った。また翌日は工藤さんと二人でぼた餅を作った。みんなよく食べてくれてうれしい。あと3日でBCもたたむ。

7月29日、ニマ・テンバとイタリア・スペイン合同隊が11時すぎ登頂した。帰路のポーターが早くも上がってきた。ゴミを燃やしたり、空缶をまとめたりする。

7月31日、BC撤収、下山にかかる。

7月31日にBCを出発して5日目、8月4日にアスコールに下りてきた。山崩れで道が不通となりジープが上がれないので、トンゴまで更に歩く。ポーター賃の支払いに手間どって昼になってしまった。テントで寝るのも今夜が最後だ。雲表倶楽部隊（ガシャブルムI峰）はスカルドへ出発していった。アンドーラ（スペイン）隊、信州大隊は泊りだ。

8月5日、スカルド入り、サッパラ・インに泊まる。フライト待ちで8日まで滞在する。サッパラ湖へ行ったり、シャングリラへ行く。

9日のフライトでやっとピンデイに戻った。往路の悪夢のようなバスの旅に比べると、アツという間の1時間だ。12日はタキシラへ行く。紀元2～5世紀の仏教遺跡で、辻さんは特に熱心に見ていたようだ。

海外登山というのは登ること以外に煩雑なことが沢山あるということが、身にしみてよくわかった。高みへの一歩よりも難しいことがあるのだ。

8月15日夜帰国する。

▼氷河での沢田さん（後方K₂）



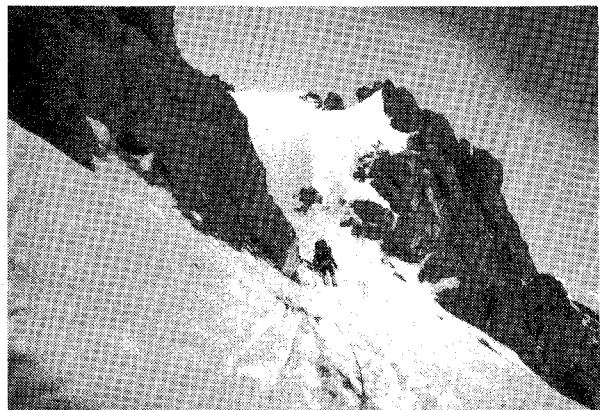
7月19日、田村、辻、中山、そしてラジャープ、サルワールの5人が、アタックにむけBCを出発。一気にC₃までの予定。C₂には12時前には着くだろう。そこからC₃までは3時間。遅くとも4時半にはC₃に着く。それからテント修復。そして明日C₃から高度差1000㍎以上の頂上アタック——という計算のもとに出発した。かなり強引な計画である。好天気が3日と続かないのだ。前回、C₄建設とアタックに出たものの、悪天に捕まり、C₃から追い返された。強風下、潰れていたテントの修復もできなかった。

C₁までの途中、変な雲が頂上にかかり始めた。悪天が予想される。風が吹き、小雪が舞いはじめた。予定通りC₂に着いたが、ガスと風雪の中であつたテントに入り、とりあえず茶を沸かしてようすをうかがう。小雪が舞っているものの、日もさしてきた。行こうか、と私は言った。一足先に着いた2人のHPをみると、1人は上の方を歩いている。聞いてみると、サルワールが古いフィックスロープを取りに行つたのだという。今日彼等は上に行く気はないらしい。時間的に上の雪の状態がよくなく、止めたほうがよいという彼等の意見。たしかに気温は高い。雪が団子になったりで労多く、雪崩も怖い。こうした否定要素がある以上、無理することはない。一日多くかかるが、好天になることに賭け、C₂泊とする。

明日はC₃までゆつくり登ってテントの修復。あさつてアタック、という順当な計画に収まった。私の場合これが幸いしたと考えている。無理してこの日C₃まで登っていた場合、果してアタックの余力が残されていたらうか？

7月20日、天気はよくなった。8時頃C₂を出発、11時頃前後して全員C₃に着く。潰れたテントを建て直す。ポールが一本折れていただけで大過なく、建て直し、雪と氷の掻き出しで済んだ。人の入った形跡があつたがデポ品の遺失もなく、アタック装備一式を置いていた辻も一安心。茶を飲み寛いだあと、日本人の3人で高度順化を兼ね上部ヘトレースをつけに行く。中間のセラック帯の下あたりまで登る。高度にして7400㍎前後であろうか。400㍎を1時間半で登つたことになる。体調不調の兆候は何もないし天気も上々。明日のアタックはこれで決まり、コルまでは9時半から10時までに着けるだろう、などと楽観的観測にうかれる。

夜、明日の登り方の協議する。結局登頂を目指し効率第一、ノーザイル、フィックスなし。体力のあるものはどんどんラッセルをこなし先へ行く。ただし前後各々の状態の確認を怠らないこと各々ヒドンクレパスに注意し、体調管理、進退判断を的確に行い、無理しないこと。ハイポーター二人と田村辻はロープを1本づつ持ち、中山はビバーク装備を持つ。要するに、自分



▲ C₂~C₃間(6600㍎付近)



の責任でそれぞれ勝手に登ろうというものであった。

C₂の隊長から頂上着タイムリミットは午後3時とすると無線があった。さてこのあと、交信でC₄建設のためハイポーターを1人残しておいてくれないかと言ってきた。建設をニマ・テンバ1人に負わせるのは酷だというのである。要求は最もであったが、難題であった。われわれは体力のある2人のラッセルをあてにしていたし、2人とも登頂意欲に張り切り、すでに離れたテントで寝入っていた。ここでいきなり起こして一方の登頂

▲カラコルムの夜はふける
機会を奪うというのは不本位であり、この説得は私には荷が重かった。そしてこのトラブルによる彼等のペースメーカーとしての意欲喪失を恐れた。

好天気が今後続くという保証はないし、今回逃したら、自分達のみならず、隊としての登頂も覚束ないのでなかろうか？ 一方要請を断れば、隊長達の僅かな登頂機会を封じることになるのだ。辻は要請に応じられないと言い、中山はなんとも言えないと言った。私は迷った。結局我々の登頂の可能性に傾いた。C₄建設は明後日であるとすれば、5人中1人や2人は参加できる余力があるだろう、などという、当てにならないき弁に逃れて要請を断ったのである。ともかくも了承された。屋根に上がった山羊の規制は難しい。アタック直前の高位置という優位点から、横車を通したのだ。あとは無事に登頂をなしとげるといふことで、応じるしかなかった。

7月21日、スープとビスケットという簡単な朝食のあと、予定通り3時にアタックに出発。無風快晴、星が瞬き文句なし。寒し。しかしリチウム電池のヘッドランプは全く問題なし。ラジャーブ、辻が先行し、サルワール、田村、中山と続いた。セラック帯手前あたりで夜が明けてきた。傾斜の増した左側からセラック帯に入り右手に入っていく。私の先を行くサルワールが斜面で後ろに引っ繰り返るように転び、そのままうずくまって動かない。近づく、ヘルプと言う。ヒドンクレバスに足を突っ込み、抜けならしい。体に手をかけ引っ張ったが動かない。無理に引っ張り靴が抜けたら厄介なので、下側を掘り足を抜いた。彼の体力は今のところ私とどっこいみたいであり、しかしプライドというわけか、私の先に行くことに必死の体。右に行くと広く平らな所に出、左側に大きな穴がある。ここいらがC₄設営計画地だろう。先行の誰かのストックと空のテルモスが置いてある。行くとやがて垂直な氷壁がある。右手の階段状のところから難無く登ると、脇に下降用の支点と残置ロープがあった。

振り返ると遅れていた中山が帰って行く。ビバーク装備を受け取るべきだったろうか、今となっては仕方がない。他の3人は黙々と100m程先に行く。まだまだ日があたらず手がじんじんと痛い、あとは順調。コルが近づく直下の壁が迫ってくる。自然右手から直登する。北峰寄りの左手に何本かの残置ロープが見えるが今は荒れていてルートにならない。直下、岩壁際の窪地に出、こ

こから左手に寄り急な岩の間を抜けるとコルだった。ここの下りではロープがあつたほうがよい。ここの岩は集塊岩である。3人は既に着いて休んでいた。コルは日が当たっていて、穏やかで暖かかった。10時半頃だった。このコルが今日の節目であり、ここに至って順調ならば、半ば成功したと私は考えていた。順調な経過と幸先に私は微笑んだ。天気は相変らず申し分なく、皆さん全く元気だった。おやつを食べ、一休みして出発。

ラジャープが力強く先を行く。頂稜は8000前後の連なりであり、私にとって未知の世界。用心してゆかなければと、体と思考力をチェックする。徹夜明けみたいなボーッとしたまぶしい感じはあるが、あとは問題ないようだ。この先ノーザイルで結構な岩場を緊張して通過する。そのさきで残置ロープがでてくる。よく確かめ、ホルドを揺すり、アイゼンの爪の乗りを一步一步確かめながら通過する。振り返ると北峰の中国側の壁の雪が凄まじい。岩場、雪壁、雪庇と変化に富んだアップダウンが面白い。8000前後の稜線上での行動という、自尊心に満足する。小休止した場所にザックを置き、カメラだけで上へ向かう。

広いところで先行の3人が儀式的のポーズを取っている。

ここが頂上だというのだ。私は疑った。ここがいわゆる前衛峰で、頂上はさらに東方に弓なりの稜線の先、船のへさき状のピークだろう。辻は、あれはガッシュブルムだなどという。山森(HAJ)氏の疑念を思い出した。同意してここで打ち切りたいという誘惑に一瞬かられたが、いや待て。今後二度とここを訪れることはないだろうこの今、ここではしよつては一生に悔いを残すことにならぬ——頂上はもつと向こうだ、と私は言った。岩に掴まりながら後ろ向きでギャップに降り登り返して、なだらかな露岩帯をしばらく行く。

頂上だった。13時30分、前後して全員到着。まぶしい逆光に霞んだガッシュブルムの峰々が先に見えた。無線で登頂を告げる。C₃の隊長とBCのリエゾンから祝福をうけ、礼を述べた。どこか実感の乏しい、棚からぼた餅といった感じの8000前後峰登頂であつたが、ひとつ何かが決着し、節目を迎えたのだといった感慨があつた。これみよがしのK₂の左奥に見えるのが、二俣(HAJ)さんが彷徨っているクラウン峰だ。北には河底は見えないがシャンクスガムの谷。その向こうに荒涼と広がる中国の山々——感慨がある。いずれも去年踏破



▲頂上はまだか!!(8000前後)

した馴染の地域なのだ。こうして再会できるとは希有であり、多分私は運がよいのだ。写真を撮り、あとは長居は無用。それぞれが慎重に降りるだけだった。

HPの2人はどんどん降りていった。こちらはマイペースで慎重に。何の不安もなくコルに帰ると、ロープがセットして、これを使って急傾斜を過ぎ、まずは一安心。後は2時間もあればC₃に着けるだろう。さてどうも変なのだ。十歩も降りると足がどうにも上がらなくなるのである。この症状はいきなり来た。足に酸素が回らないのだろう。これは呼吸



不全だと考えた。肺機能が低下しているのだ。いくら呼吸しても空回りしているみたいで回復がないのである。先行の3人はすでにC₄予定地あたりまで降りていた。C₃と交信時間になり。全員無事下山中ということ、私は少し疲れていてゆっくり降りると伝えた。呼吸不全とは言えなかった。「酸素だ」「救援だ」と大騒ぎになるだろう。十歩降りては休みこれを繰り返す。自己診断をした。頭痛なし、胸痛なし。寒気もなし、凍傷もなし、意識正常。バランスもよし。咳もなし。ただ呼吸が限界にまであり、動作

▲頂稜でのハイポーター

の緩慢と足のふるえがある。眼鏡のせいかはずしてみたが、視界の霞が少しあった。高山での疲労困ぱいと異常は通例であり、その程度と内容は多種多様。では私の場合どうなのか？この程度はありふれた軽いうちだろうと考えた。

ようやくC₄予定地も近い氷崖の上に達し、どつかりと腰を落して休む。テルモスは空っぽ。一日中晴天にもかかわらず、雨フタの中のポリタンは凍っていて、一口ぐらいしか飲めなかった。晴天下の熱射にさらされていれば雨フタの水は凍らない、と考えていたが、甘かった。雪を噛みながら菓子を少し食べた。原因は水分不足ではないかと考えた。肺が乾いて機能低下となったのであろう。これまで毎日4~5リットルの水分をとってきた。それなのに、アタックというこの過酷なときに限って1リットルというのは、いかにも無理がありそうだ。尻制動で降りるといえるのはどうだろうと考えた。ザックにロープが1本あった。重いものは捨ててしまえと、試しにこれを流してみた。するすると流れてゆき、ずっと下のクレバスの縁で止まった。やはり危険である。隊のロープがセットされてあった。私は8環もユマールもあえてこの日は持たなかった。カラビナ肩絡みでこれを無事降り、どうにかC₄予定地を過ぎた。

日が山陰に落ちた。あとは真っ直ぐ降りるだけ。呼吸以外に障害はなく、何の心配もなかった。しかしこれが悪天候下だったら事態は酷いものだろうと考え、晴天という運の良さに感謝した。のろのろとおりながら、妙な考えに取りつかれた。私の今の肺は、伊藤さんからの借り物で、従って早くC₃に降りてこれを彼に返却しなければならない、というもの。伊藤さんといえば、隊のリーダーの守さんがいるが、明確に彼というわけではない。彼の他に私には義理を欠いている伊藤さんが2人いるが、いずれとも言いがたい。男ではあるようだ。というのも、右手ずつとに家みたいなものがあり、その脇に彼の奥さんという、スカートをはいた婦人が認められた。なるほどこれが幻覚というものかと、一方では覚めていた。しかし一方ではこの考えから逃れられない。それでは私の肺はどうしたのかといえば、わざと咳をする気管の奥のほうに軽い痛みがあり、それがそれで、奥の方にしまいこまれてあるのだという。

C₃では飯場のような小屋があり、壁沿いにドラムカンが積んである。地面に3個、その上に2個。さてその上に1個乗らなければならないというのが、私の借り物の肺である。積荷の眺めが正三角形を欠いているため、C₃では不

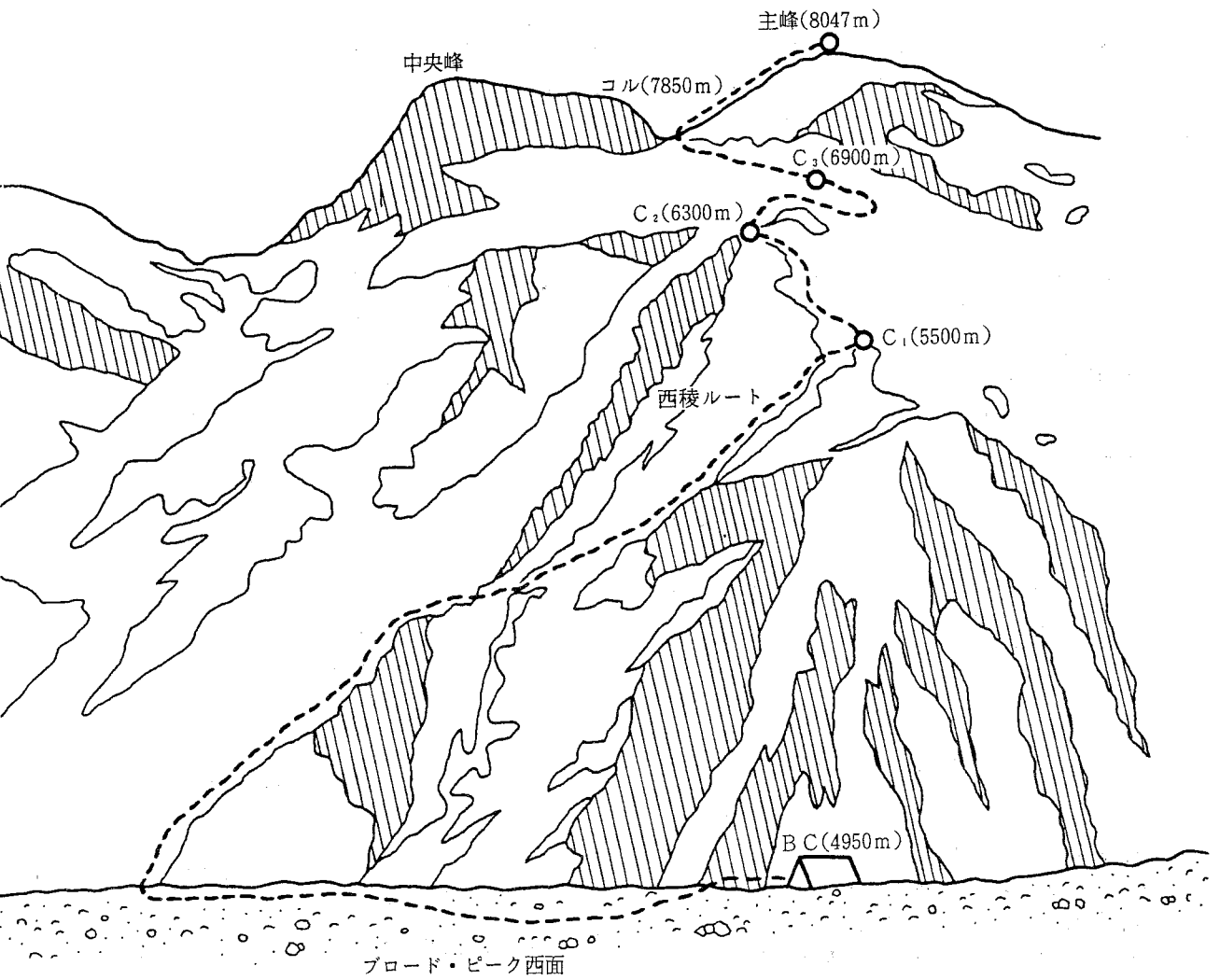
安定を囲っている。早く降りて積まなければと、なんとももどかしい。とつぶりと日は暮れ、ヘッドランプをつける。西方の山に時々稲妻が走り、天気は変わりつつあるようだ。よいときに登れたものだとつくづく思う。もうそろそろC₃の灯が見えるころだが、現われず、もどかしい。ランプの下の荒れた雪面にトレースを見失わないよう、気をつかう。このトレースも、伊藤ロードという。さらに、左手からパリエーションルートからのイタリア隊のトレースがあるはずであり、これに引き込まれないようにしなければならぬ、などと考える。これも幻想である。もう近い。このあたりは数えれば3回も通ったところであり、どうにか降りられたと安堵した。ちらちらと灯が見えた。ニマ・テンバだった。鼻水のつららを払ってもらい、テルモスを差し出された。ありがたかった。

狭い隊長テントに入った。21時を過ぎていた。コルから下、6時間もかかっていた。朝、出発してからは18時間。ともかく眠りたかった。液体だけを摂り、横になった。せわしい呼吸は収まらず、遠藤さんを心配させた。皆様にねぎらい、いたわってもらい感謝にたえない。酸素を分けてもらい、吸いながら眠りについた。夜中に目が覚めるとマスクが外れていて、まだ呼吸は荒かった。次に目覚めたときは、穏やかになっていた。

7月22日朝、目覚めると、ほとんど回復していた。天気は荒れ模様で、撤収と決まった。C₂からは工藤さんにサポートしてもらい、無事BCに降りられた。登頂隊はこの日全員BCに降りられた。私は右手指1本が軽い凍傷にかかり、後、爪が黒くなり、抜けた。2人のHPも凍傷を訴えた。とはいえ、私と同程度のものではあった。2人はことさら養生に気を使う。商売柄そうだろうが、サルワールは見ていて涙ぐましかった。彼が言うには故郷に何人かの恋人がいるそうで、なるほど、黒くひしゃげた爪の指では、対応に具合悪かろうというものか——。

田村 青年!! 無事BCに下山





もうあのブロードピーク登山から早くも2年がたってしまった。私自身日々の雑事に追われその時の記憶は大分薄れてしまった。いやそんな事をやった事自体を思い出すと、その機会さえ無くなってしまう。

そんなある日我が家にその報告書の原稿の督促状が舞い込んできた。丁度ネパールのトレッキングピーク（コンデ・リとクスカングル）のライトエクスペディションから帰って来た時である。それをみた時私は”何で今頃思い出したように作んのやろか？”という思いと同時に”えらいこつちや、そんないもんはほとんど忘れてしまっただけで、とりあえずその当時の日記帳を探さなあかんわー。”という思いが頭の中を交錯した。あわてて本棚の中を探すと一冊のほこりだらけのノートがぐちゃぐちゃにつつまれた様々ない書類の中から出てきた。その時改めて2年間という月日の流れを実感せずにはいられなかった。

あの登山後の2年間で私の身辺は激変した。6年間勉強しつづけた考古学を辞めた事、学生時代からつきあっていた彼女とも別れ、家族とも別れ一人暮らしを始めた事。そして今は全く違う旅の会社で契約社員としてツアーガイドをし、プライベートな登山も含め年間の半分以上は海外で暮らしている。所属山岳会も大津岳士会から京都岳人クラブに代わり山仲間もガラリと代わってしまった。少々話がそれるが、そのノートを取り上げても一度読み直してみると、みるみる当時の記憶が鮮明に蘇ってきた。日記とは不思議なものである。他人が読んでもそうおもしろくはないが（但し、ノゾキ見的なスリルと興奮はあるのかもしれない）その筆者が何年か後に読むと本当に面白い読物となっている。あつという間にその世界へ連れ戻され、再びブロード・ピーク登山をする事になった。もちろん胸の内での話である。だからここではアタック時のBCを出発してから登頂し、C₃へ帰って来るまでを克明に描きたい。

アタック前夜（7月18日）

7月8日から降りだした雪は18日まで途中2日間（7/13～14）晴れたものの後は延々と降り続けている。我々の持ち時間もいよいよ無くなってきだした。K₂ベースキャンプからトランシーバーで明日からは晴れるという情報が入った。我々ベースキャンプに入って来た。

しかしこのK₂ベースキャンプの天気予報はこれまで当たったためしがないが、藁をも掴む思いでそれに賭ける事となった。夕食後ミーティングで再度アタックメンバーが決められた。

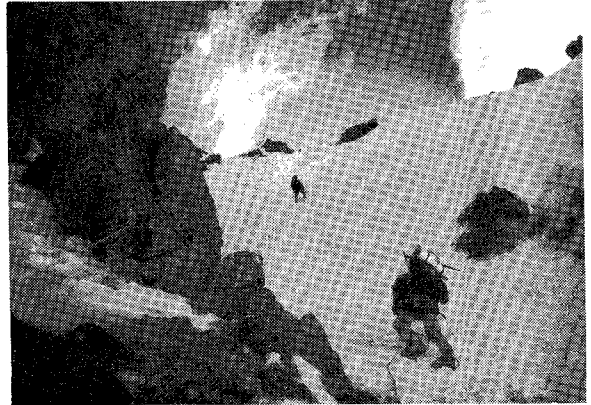
田村・中山・HP 2名そして私の5



▲ 荷物整理で明け暮れる BC

名が明日C₃へダイレクトに上がり、そこから次の日に頂上へアタックするという計画であった。その時の隊の雰囲気は10日間近く降りつづいた雪によるコンディション悪化と日数不足によってC₄が作れなかった事により、半分諦め、そしてどこか投げやりな所があり、敗色濃厚な感じだ。私自身はC₃からのアタックについて、何の不安もなく、メンバーも登山開始以来一緒に苦勞してきた仲間だったので申し分なかった。あとは天候しだいであると思った。

▼C₂-C₃の雪面登行



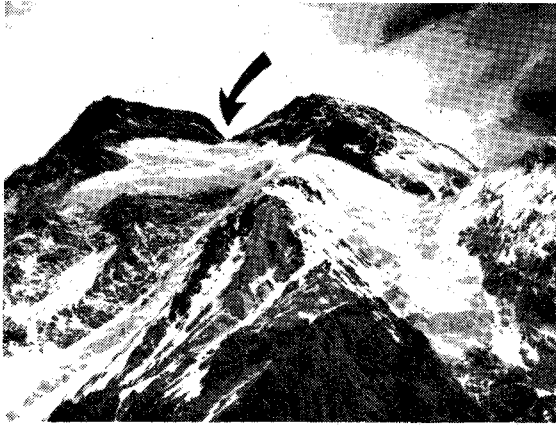
出 撃 (7月19日)

早朝5時にBCを出発した。久しぶりの晴天で、白みの少しかかった朝方の空にはK₂が以前にも増して白く、いかつく輝いている。本当に穏やかな朝を迎え、その中C₁へ向け快調にとぼしC₁へは7時前に着いた。しかしそこからは膝まで潜るラッセルを強いられスピードはあがらずラジャープ、サルワール私の3名で交代しながらラッセルを繰り返した。C₁を出発してまもなくブロード・ピークの主峰と中央峰の間のコルを中心に円を描く様に虹色の雲が現われた。これは紛れもなく悪天の兆しであり、1回目のアタックの時にも、同じ様にC₁を出発した頃に出現し、C₃へむかう頃には雪が降り再び荒れだした。その時”また出直しか---。いやもうアタックのチャンスは無いのかもしれない”と半分投げやりな気持ちになり、テントの中でゴロリと横になった。そしてC₃にデポしていた自分の個装の回収の事ばかりを考えるようになった。

昼頃太陽が雲の間から見え隠れしだした。しかし相変わらず雪もばらついていた。それを見ながら「こりやダメだ。C₃だけでも明日建て直したいな」などと言いつつ中山・田村・私の三人で夕食を食べた。そしてサルワール・ラジャープは相変わらずチャパティーにジャムをつけたのを満げに隣のテントでむしゃついていた。久しぶりの上部テント生活でもあり、長いBC生活を続けていた事に区切りをつけられた事だけでも充分であった。

C₃再建設 (7月20日)

予想に反して今日は大快晴であった。これでC₃を建て直す事ができると思って出発した。他の隊員はまだ準備をしていたので1人でトレールをつけるはめになった。1人でラッセルをし、時々後方を振り返るも、他の隊員は一向に追いついてくれない。それどころか、さらに距離がひらいた気さえした、とうとう岩と雪のリッジを終え、なだらかな雪の斜面を登りきり、C₃直下まで1人でラッセルしてしまった。そこでようやくラジャープが追い付いてくれラッセルを交代してくれた。ブロード・ピークの頂稜から太陽の暖かい陽差しは強烈に強くその光線は顔など露出した肌を突き差しジリジリと焦がすようで暑い。テントはこれまでの風雪のため押し倒されて半分雪に埋っていた。ポールなど



▲主峰と中央峰のコル(7850㍎)

しく、きちんと整理されたはずの装備類はちらかされ、私のシュラフは袋から出されたまま放置され、そいつの体臭と強烈な香水の臭いがしみ込み、その上放置されたものだから氷づけになっていた。ガスや食糧なども使用され減っていた。どうもヒマラヤという所にはクライミングに対する論理・道徳といったものは通用しないようだ。とにかくどんなひどい手段を使おうとも頂上に立ちさえすれば勝者となり、それがルールとなっているようにさえ感じられた。

午後はテントの上に氷づけになったそれらの装備を乾かすためにのせ、その間田村さんと2人でC₄付近までトレースをつけた。雪は少々深いが体力的にもコンディションもそう悪くはないと判断した。あとは天気が続いてくれる事を祈るばかりであった。そんな時にちょっとした事件が起った。

それは定時交信の時、登攀リーダーの声がトランシーバーから飛び出してきた。「C₄建設がニマ・テンバのみでは無理なのでサルワールを明日アタックさせないで、こっちにまわして下さい。さもなければ第2次アタックは出せません。」とアタック前夜のもう寝ようとしている時に言ってくる。一度は断わったものの何度も要請してくる。すでに決定したメンバーのはずなのに今となっては変更を求めてくるのはどうも勝手すぎる気がした。それに好天期間はここに来て明らかに短くなっている。明日すら晴れてくれるかわからない時に3日後のアタックの事などを考えている。そんな可能性の薄い第2次アタックよりも明日の第1次アタックの方がその時の私には大事に思えたのだ。幸いにも田村さんがその要求を頑強にはねのけたのでたいした事にはならなかった。夕方7時にはシュラフに入って寝た。明日は午前1時30分の起床である。

登頂(7月21日)

緊張のため夜中数回ハッと目を覚まし反射的に時計を見た。そしてその度に小便をしにテントの外へ出た。夜空を見上げると星が一面に広がっている。その星の一つ一つに遠近感があり、立体感のある空間が頭上に存在していた。地球も宇宙の中の一つの星にすぎない事を実感した。午前1時45分予定より少し遅れて起床した。シュラフを素早く片付け前日作っておいた水をどンドン沸かしお茶をガブガブ飲んだ。朝食ではビスケットにジャムやチョコレートクリ

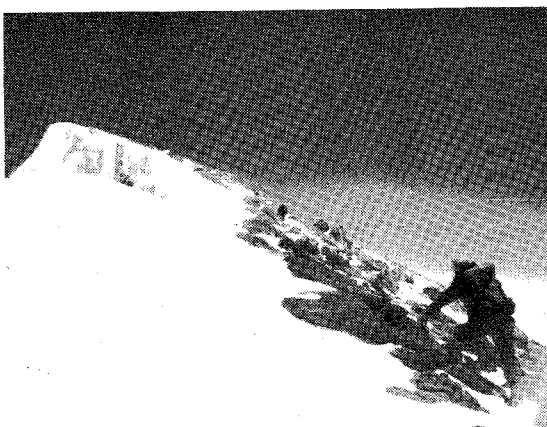
ムなどをつけて食べた。あまりうまく感じられずあまりに素気なさすぎる様に感じた。この様な食事よりもあつたかい雑煮でも作って食べた方が良かったかもしれない。それから私はテルモスを2本持って来ていたのでその中にお茶を満たすのに時間がかかり、テントを出たのは3時頃となった。

隣のテントからは、すでにラジャーブとサルワールが出ており出発準備を済ましていた。空は相変わらず満天の星空が広がっており風もいっさいなく。ヒシヒシと冷えた大気の中にはただアイゼンやらピッケルやらがふれるキーンキーンという音のみが広がり消えていき、その静寂さを強調した。周りの山々は星灯りを受け淡く輝いているが、その輝きは限りなく冷酷で無気質的だった。

午前3時20分いよいよ出発だ。ヘッドライトを灯し、ラジャーブ・サルワール・私・田村・中山の順で列をつくり高みをめざした。昨日つけておいたトレースは氷つきC₄までは快調なペースで歩く事ができた。トレースがなくなりだす頃中山がかなり遅れだし、サルワール・田村も少し距離が開きだした。この頃から地平線が白く輝きだし、K₂の頂上付近では雪が赤く輝きだした。まるでそれは生命を得て蘇ったように。

ラジャーブと私とで交代しながらラッセルを繰返した。雪はどんどん深くなり腰ぐらいまで潜るためペースはガクンと落ち体力の消耗が激しくなった。しかしラジャーブだけはこの高度になっても一向にスピードが落ちなく、私は彼について行くのに精一杯の状態であった。だからラッセルを交代する時は少し息を整えてからでなければとでもきつくすぐにはできなかった。

夜が完全に明けきった頃、バンド状にはしる氷の壁の基部に着いた。とまどうラジャーブからトップを交代し、登ろうとするが、右手にピッケル左手に古いフィックスロープをつかんで登る事は至難の技であった。もう使う事もないだろうとパイルを途中に置いてきた事を後悔した。これにより田村・サルワールは追い付いて来てくれたが中山の姿はもう確認する事はできなかった。上を見上げるとそこにはコルが目前に迫っていた。そしてそこで最初の交信の時聞きとなり（午前9時）登攀リーダーと交信した。「あと何時間でコルに到着できそうですか？」という問いに対し、「1時間もあれば十分です」と答えた。コル到着時間のタイムリミットは午前11時前後と決められていたので、かなり余裕があるなど思ったがすぐ上に見えて



▲最後の頑張りがキツイ

最後のコル直下の急な雪壁は氷化しておりラッセルから解放されたおかげでなんとかコルへ這い上がる事ができた。そのとたん暖かい陽差しが私の身体をつつみ込んだ。そして普段は見ることのできな稜線の向こう側に目をやると中国側の広大な展望を見渡すことができた。パキスタン側の天空を切り裂かんとするばかりの山稜の連なりとはうらはらに中国側は何とたおやかな峰々が広がっているだろう。コルから少し行った所にラジャーブが座わり込んで行動食を食べていたのでここで大休止をとった。しばらくす

さな場所にすぎないのだが我々にとって、それは宝島みたいなものなのだ。

7月21日午後3時25分4名が登頂した事をBCへ報告した「We are success!」すると興奮したLOが早口の英語でまくしたてるように祝福を述べてくれた。

かろうじて「Congratulations!」だけは聞きとれたがそれで私は満足であった。他の隊員達も、それぞれ感動や達成感、思い入れなど凝縮したものをこめて互いに握手をしあつた。特にサルワールはラジャーブにだきついて泣いていたのが印象的であった。

私は今8000呎の世界にいるのだという事を実感させるために周りの景色を見渡した。そこからは、すぐ足下にガシャブルムIV峰があり、そこから意外と離れた所にガシャブルムI~III峰の山並みがあり、いつのまにかチヨゴリザさえもあんなに低くなってしまっている。しかしK₂だけはなおも圧倒的な高さで天空にするどくそびえたっていた。どこを見まわしても蛇のようにのたうちまわる氷河と波のよううねる山々しか存在せず、他のものが存在する事を拒絶しているようであった。

それらの景色を写真に取めた後14時頃下降を始めた。大休止をとった例のコルに到着するまでは、ナイフリッジやクライミングダウンなどが連続するので気は抜けなかった。そのコルに到着してからは後を振り返ると、いつの間にか田村の姿が見えない。かなり疲れて遅れているようだ。コルで休憩がてら彼を3人で待っていたのだが一向に来ない。我々もツェルトを持っていなかったので(途中で退却した中山が持っていた)再び下降を開始した。氷化した雪壁を下り終え、プラトーに到着した頃には太陽は少し西に傾き、ブロード・ピーク西面にはおびただしい太陽光線が降り注ぎ風もなく、大気はまどろみ私を眠りに誘い込もうとする。

少し腰を降ろして休むとうつらうつらと居眠りをしてしまう。夢の中で春の陽気の中、家の縁側で犬と一緒にひなたぼっこをしている気分になってしまった。自分ではごく短時間のつもりでいたのだが実際には長時間雪の上に座り込んで居眠りをしていたようだ。少年時代の懐かしい気分から再び現実世界へ自分自身を引き戻し、すぐそこに在るはずのC₃へ下降を再開した。そして到着したら思いつき水を飲みたいと思った。そうなのだ1.6リットル持っていたお茶もとつづくに尽き果ててしまい、喉がカラカラでなかなか力が出ず、すぐにバテてしまうそういった要素も手伝ってC₃到着を増々遠いものにした。太陽が山際に隠れようとする頃(午後6時30分)ようやくC₃に到着した。



C₃にはスペイン隊や他の人々が多勢いて口々に「Congratulations!」「おめでとう!ご苦労さん」などと祝福され、改めて登頂成功した事を実感した。先に到着したサルワールも満足げに顔をほころばしていた。ラジャー

▲ 1993-7-21 15h25m -----

ブもその1時間後に到着したが田村さんだけはまだかなり上部にいるようだ。

私はただ無心に水を飲み続け、そのままシュラフに入って寝てしまった。この長い長い登山もカラコルムの山並みに沈む赤くすすけた太陽と共に終りを告げた。

撤収（7月22日）

朝起きると田村と遠藤が隣りで酸素を吸って寝ていた。話を聞くと昨晚9時頃ニマ・テンバにむかえられて降りてきたらしい。これで全員無事に帰ってこられた事になる。またテントの外はガスがたちこめ荒模様の天気となっていた。改めて我々の運の良さ、タイミングの良さを実感せずにはいられなかった。関根隊長自ら雑煮を我々のために作ってくれた。思えばアタック前夜の夕食（2日前）以来まともなものを口にしていなかったのも、温かいものが胃袋に流れ込まれた時、どンドンそれが吸収され力に代えられていく様な感じであった。

個装などをつめ込み、風雪の中、もう二度と戻る事のないC₃をあとに、B Cへ下っていった。C₁からの下は登山開始頃と比べ雪はほとんど無くなり、岩と氷ばかりが露出していた。それらが我々の登山の長かった事を如実に語ってくれた。

海外登山をおえて

辻 信広

このエクスペディションは私にとって初めての体験であった。海外登山全体から見ても3年前にモンブランに登っただけで高所の経験は一切無いに等しかかった。ただ国内ではそれなりに内容のある登攀をしてきたつもりだ。そしてそこで培ってきた技術・体力・精神力のおかげで今回の登山でさほど問題となつたことはなかつたが、しいて言えば7500を越えてからの、自分の登攀能力がガタンと落ちる事を自覚したことが収穫であったと言えよう。またブロード・ピークの西稜自体それほど難しいルートではないにもかかわらずフィックスロープをベタ張りにせねばならなかつた事への疑問、ひいてはクライミング倫理やルールといったものをもう一度考えさせられた。そして日本のヒマラヤ登山の現状を知った気がする。様々な意味でこの登山は私の心にいろいろな思いを深く刻み込んだ。隊員達の事、そしてこのきびしい環境を生きぬいているポーターやコック達のしたたかさ、最後にそれら全て包みこみ我々に素晴らしい思い出を与えてくれたカラコルムの大自然----など。



▲ ポーター賃支払中の辻(右)

収 入

個人負担金 ¥7,940,000

協力金・他 ¥111,125

収入 総計 ¥8,051,125

支 出

国内 明細

登山料、他 ¥356,375(4%)

渡航費、他 ¥1,485,412(18%)

装備 購入 ¥521,665(7%)

食糧 購入 ¥70,962(1%)

O₂ボンベ購入 ¥181,921(2%)

船便 輸送 ¥298,042(4%)

雑 費 ¥240,781(3%)

報告 諸費 ¥479,247(6%)

¥3,634,405(45%)

国外 明細

人 件 費 ¥2,050,541(57%)

宿泊滞在費 ¥695,573(16%)

輸 送 費 ¥509,567(12%)

食糧装備費 ¥367,359(8%)

保 険 ・ 他 ¥338,450(8%)

¥4,416,720(55%)

支出 総計 ¥8,051,125

<付記>

為替相場の激しい変動で、出発時には1US\$が¥120前後だったが、8月10日すぎには¥100前後になった。したがってルピー価も当初1US\$が27ルピーだったが、33~34ルピーにと安くなった。たとえばエージェン料を出発時に支払っておけばよかったが、帰国時の精算では約6000ルピーの支払い増になった。

ドル安とルピーの下落によるダブルパンチでかなり支出が増になった。ドル安とルピー安によるダブルパンチでかなり支出が増えたのではないか。隊荷の遅れによる滞在費、通信連絡費が多い。

沢 田 幸 子

発 行 日本ブロード・ピーク登山隊 93
〒133 東京都江戸川区西小岩 3-30-15

発行日 96年5月30日

編集者 伊藤 守・沢田 幸子 写真・関根 幸次
イラスト・藤井 弘(ミザール)



田村 正勝

辻 信広

ニマ・テンバ

伊藤 守

関根 幸次

LO カマール

中山 裕朗

工藤 敦子

遠藤 京子

沢田 幸子

